

第73回国際理解・国際協力・多文化共生のための高校生の主張コンクール東京都大会 金賞

淑徳与野高等学校 2年

中北 理智

課題 ③

生まれや宗教、性別に関係なく、一人ひとりが自分らしく生きることのできる国際社会の実現に向けて。

副題

ともに生きるための想像力を

本文

3 ともに生きるための想像力を

テーブル一面に並んだ缶詰やパン、野菜、お菓子を仕分けながら、私は「こんなに沢山必要なのだろうか」と思っていました。そこは、アメリカ・サンディエゴにあるキリスト教の教会です。留学中、土曜日の早朝に行われる食料支援のボランティアに参加しました。

やって来たのは、ヒジャブを身につけた女性や幼い子どもたち。アフガニスタンやシリア出身で、ほとんど英語を話せません。私は身振り手振りで欲しい食料を尋ねました。イスラム教徒に配慮し、豚肉を含まない食品が数多く用意されていました。

キリスト教の教会に、イスラム教徒と思われる人たちがやってくる。その光景は、私の思い込みを静かに壊しました。「宗教が違えば、助け合う相手も違う」。私はどこかでそう考えていたのです。教会の前の看板には、聖書の言葉ではなく、「アメリカでの暮らしはどうですか」「英語を学ぶのは難しいですか」といった励ましの言葉が並んでいました。

帰国後、私は彼女たちの背景を調べました。米軍がアフガニスタンから撤退した二〇一一年からの一年間で五〇五五人の難民らがサンディエゴに移り住みました¹。その約六割がアフガニスタンから来た人々でした。さらに、私が暮らしていたエルカホンという町には、大きなアフガン・コミュニティがあることを知り、驚きました。移民や難民に関心を持っていたはずなのに、同じ町で暮らす彼女たちの存在が、見えていなかったのです。

このことから私は、安全な場所に「受け入れる」と、「ともに生きる」との間には、深い谷間があると感じました。UNHCRは、難民の地域統合には、難民と受け入れ社会双方の変化が必要だと説明しています²。国連の「難民に関するグローバル・コンパクト」も、政府だけでなく、市民社会や地域の人々を含む社会全体での取り組みを掲げています³。あの教会でのやりとりは、この構想が普通の人々の手で実践されている姿だったのだと、今では思います。

人が人を支える関係は、一方向ではありません。一緒にボランティアをしていたフィリピン出身のおじいさんは、「自分がアメリカに来たとき周囲の人々に支えてもらった。次は自分が誰かを支え、助けたい」と話してくれました。私は、この支え合いの連鎖にともに生きるこの意味があると感じまし

た。

そこで改めて自分の町を見ると、私が暮らす高田馬場は「リトル・ヤンゴン」とも呼ばれ、新宿区全体にはミャンマー国籍の人が三七六三人住んでいます⁴。そこで、ミャンマーのお店を調べると、駅前のビルがヒットしたのです。足を運ぶと、小さなビルのなかにミャンマー語の不動産屋、旅行会社、レストラン、食材店が軒を連ね、多くの人を訪れていました。いつも通り過ぎていた場所に、一つのコミュニティが息づいていることに、私は衝撃を受けました。また、私の幼馴染もミャンマーにルーツを持ちます。しかし私は、彼の背景をほとんど知りませんでした。サンディエゴで気づいた「見えていなかったもの」は、日本の日常にもあったのです。難民の受け入れや外国人との共生を社会問題として考えるだけでなく、まず身近に暮らす人を知ることが大切なのだと思います。

SDGsの目標一〇には、年齢、性別、出自、宗教などに関わりなく、すべての人々の社会的な包摂を促進することが掲げられています⁵。一人ひとりが自分らしく生きるためには、相手に適応を求めだけでなく、私たちも相手の声を聞き、自分たちの「当たり前」を問い直す必要があるのではないのでしょうか。

教会の看板には、「故郷が恋しいですか」とあり、「故郷」という言葉だけがアラビア語で書かれていました。ともに生きるとは、異なる人をただ受け入れ、同化を求めることではありません。私たちも相手を知り、変わっていくことです。国連UNHCR協会の「もしもわたしがあなただったら」という言葉のように、私はまず、自分の隣にいる人の立場を想像することから始めたい⁶。国際社会とは、遠くにあるだけでなく、私たちの足元にもあるのです。

【出典】

¹ San Diego Country Resettlement Agencies, Monthly Refugee Arrivals Report for FFY 21-22 by Country of Origin (2021 年 10 月～2022 年 9 月の受け入れ実績)。

² UNHCR執行委員会「地域統合に関する結論」第 104 号 (Conclusion on Local Integration, No. 104, 2005)。

³ 国連「難民に関するグローバル・コンパクト」(Global Compact on Refugees, A/73/12(Part II), 2018)。

⁴ 新宿区「住民基本台帳の外国人住民国籍別男女別人口」令和 8 年 8 月 1 日現在(男性 1,697 人、女性 2,066 人)。

⁵ 外務省「JAPAN SDGs Action Platform」目標 10・ターゲット 10.2。

⁶ 国連UNHCR協会「世界難民の日 2026 キャンペーン『もしも わたしが あなただったら』」。